

雪印メグミルク(株)

本社所在地	東京都新宿区四谷本塩町5番1号
創業 / 設立	1925年 / 2009年10月1日
売上高	5,843億8百万円 (2023年3月期・連結)
会社URL	https://www.meg-snow.com/
環境保全関連URL	会社HP ~ サステナビリティ ~ https://www.meg-snow.com/csr/ 会社HP ~ 総合報告書2023 ~ https://www.meg-snow.com/csr/report/pdf/2023/all.pdf
サステナビリティデータ	会社HP ~ ESGデータ一覧 ~ https://www.meg-snow.com/csr/esg-data/

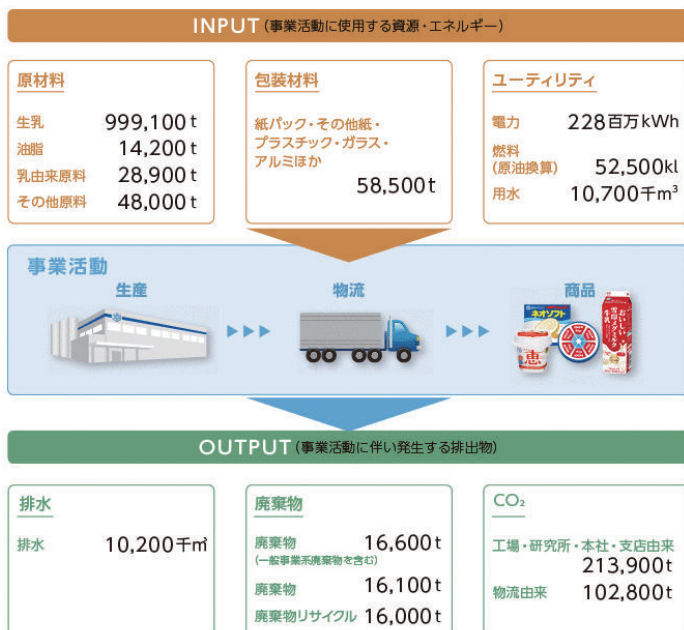
持続的成長に向けた環境方針・目標

■ 環境方針

私たち雪印メグミルクグループは、自然の恵みから生まれるミルクを中心とした事業活動と地球環境の共生を目指します。そのために、「雪印メグミルクグループ 企業行動憲章」に基づき、「雪印メグミルクグループ 環境方針」をここに定め、持続可能な資源の有効利用に努めます。

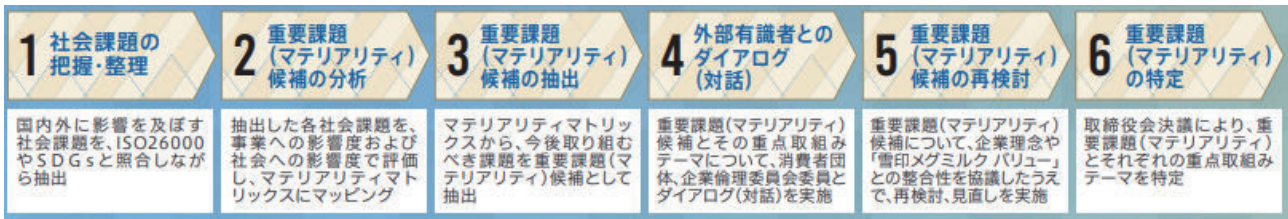
1. 法令の遵守 環境法令・条例および自主基準を遵守し、法改正などに迅速に対応します。
2. 環境への配慮 重要課題（マテリアリティ）を特定し、KPIを達成することで、限りある資源の有効利用、温室効果ガスや廃棄物の排出抑制、リサイクル・リユースに継続的に取り組みます。
3. 環境意識の向上 環境保全に対する自覚を持つとともに、環境教育を積極的に推進します。
4. 生物多様性の保全 事業活動において、資源を持続可能な形で利用することで、生物の多様性を保全し、未来の社会作りに貢献します。
5. 環境情報の開示 環境情報を積極的に開示し、透明性のある環境保全活動に努めます。

■ 事業活動と環境影響（マテリアルバランス）



重要課題（マテリアリティ）の特定

● 特定プロセス（2018年）



● 環境に関わる重要課題（マテリアリティ）

酪農 酪農への貢献 持続可能な酪農への貢献	酪農生産基盤強化への取組み推進	毎年	日本酪農青年研究連盟の運営支援および酪農総合研究所の活動により、持続的酪農経営を行うための経営管理・技術的支援を行う	・日本酪農青年研究連盟主催の各研修、日本酪農研究会、酪農懇談会などの運営を支援。 ・酪農総合研究所シンポジウムを、実参加、Web参加によるハイブリッド形式で「今こそ飼料の国産化を！」をテーマに実施。260名が参加	A	P.52	
		2030年度	自給飼料型酪農の推進のため、雪印種苗の飼料作物種子の作付面積を2019年度比で3%増やす	3.7%（2022年度作付面積101,455ha）	B	P.52	

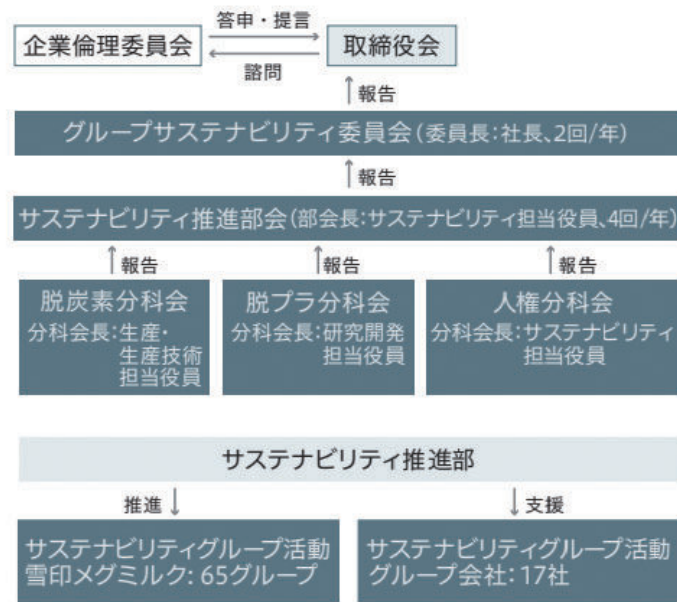
環境 環境負荷の低減	地球温暖化の防止	2030年度	CO ₂ 排出量50%削減（2013年度比）	23.5%	E	P.41		
		持続可能な資源の利用	2022年度	使用する紙を100%環境に配慮した原材料にする	97.7%	F		-
			2026年度	認証パーム油100%調達 *対象は精製パーム油	14.5%	I		-
	2030年度		石油由来のプラスチックの使用量（売上原単位）25%削減（2018年度比） *削減には、石油由来プラスチックから、リサイクルプラスチックやマスバランス方式のバイオプラスチックへの置換も含む	5.3%	F	P.42		
	循環型社会の形成	毎年	・紙・バイオマスプラスチックの容器を優先して使用する ・ペットボトルの使用量削減のために、社内のマイカップ・マイボトルを普及推進する	・学校給食用牛乳へのストローレス容器の導入、果汁飲料用ストローのバイオマスストローへの切り替えを進めた ・雪印メグミルクの複数の部署が、プラスチック廃棄量削減に向けて、職場におけるペットボトル使用量の削減や、マイカップ・マイボトルの使用促進に取り組んだ	A	P.42		
		2030年度	廃棄物排出量30%削減（2013年度比）	19.6%	G	P.36		
		2030年度	廃棄物リサイクル率98%以上を維持	98.8%	G	P.36		
	循環型社会の形成	毎年	食品廃棄物リサイクル率95%以上	94.8%	H	-		
		毎年	環境に配慮した商品開発を推進する。（既存商品、新規商品の賞味期限の延長や、賞味期限の年月表示を積極的に推進）	家庭用乳食品1品、家庭用市乳9品の賞味期限延長を実施した	A	-		
		2030年度	生産拠点の用水使用量9%削減（2013年度比）	7.6%	G	P.43		
		毎年	生産拠点の水リスクを確認し、事業継続のリスク評価を行う	水リスクを確認し、事業継続のリスク評価を実施した	G	P.68		

推進体制

■ サステナビリティ推進体制

雪印メグミルク社長が委員長を務めるグループサステナビリティ委員会を設置し、グループ全体のサステナビリティを経営レベルで推進しています。重要課題（マテリアリティ）のKPI進捗確認や、達成に向けた協議を行い、取締役会に報告します（2022年度：2回実施）。グループサステナビリティ委員会の下にサステナビリティ推進部会を設置し、脱炭素、脱プラ、人権の各分科会からの報告に基づき、重要課題（マテリアリティ）の解決に向けた具体的な取組みを検討しています（2022年度：4回実施）。また、雪印メグミルクの各部署とグループ会社に配置したサステナビリティリーダーが中心となってサ

ステナビリティグループ活動を行うなど、従業員のステナビリティへの理解・浸透や具体的な取組みを推進しています。



■ 原材料調達における取り組み

国内畜産業支援・食料自給率向上①

事例概要

■ 国内酪農の持続的発展への貢献

・具体的な取り組み①／付加価値の高い、国産牛乳・乳製品の製造・販売

当社は、日本の酪農を基盤として成り立っており、日常の公正な生乳取引等はもちろんのこと、酪農生産者の良きパートナーとして信頼関係を深め、乳の価値をしっかりと伝えていくことで酪農生産者の想いに応えていかなければならない。

そして、牛乳・乳製品の需要拡大を実現することで、国内酪農生産の基盤の強化と持続的発展に貢献していく。



・具体的な取り組み②／酪総研究シンポジウム開催による酪農生産への貢献

雪印メグミルク酪農総合研究所（1976年設立）は、酪農に関わる調査研究・経営管理支援活動のほか、「酪総研シンポジウム」を1978年から継続して開催。「酪総研シンポジウム」では、制度政策から生産現場での活用技術に至るまで、専門家から提言・知見・情報提供を得て、参加者との討議を通じて共通認識の醸成、知見・技術の活用・普及を図ることで酪農生産への貢献を果たしている。

2021年度は、2019年度からのテーマ「酪農現場のリスクを考える」の第3弾として「見えない敵から牧場を守る」と題して3名の講師が講演。コロナ禍を踏まえ、前年度に続きWeb開催となったが、200名以上の参加者があった。酪農総合研究所はこうした取り組みを通じて、これからも酪農の持続的成長に貢献していきたいと考えている。

・具体的な取り組み③／日本酪農青年研究連盟（酪青研）の活動を支援

酪青研は1948年に北海道で発足した日本で最も歴史のある酪農家による研究団体である。酪青研は黒澤西蔵[※]を中心に戦後の酪農復興から活動が始まり、現在では全国へ活動の輪が広がり約1,600名の酪農家で構成されている。当社は、設立当初より事務局を担い、活動を継続的に支援している。

酪青研では年に一度、酪農家の経営成果を発表する「日本酪農研究会」を主催しており、2021年度には第72回の開催に至った。

※ 1885年生まれ。当社の前身の一つである雪印乳業（北海道製酪販売組合）および酪農学園大学（北海道酪農義塾）の創立者。北海道開発と日本の酪農の発展に尽力した。

情報源

<< 会社HP >> ～ 持続可能な酪農への貢献 ～

<https://www.meg-snow.com/csr/dairy/>

<< 会社HP >> ～ 総合報告書2022 ～ 25頁

<https://www.meg-snow.com/csr/report/pdf/2022/all.pdf>

<< 会社HP >> ～ ESGデータ一覧 ～

https://www.meg-snow.com/csr/esg-data/pdf/ESG_data.pdf

成果（見込含）

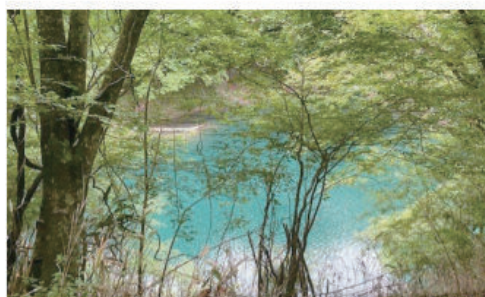
食品原材料の安定供給

《酪農》		2020	2021	2022
酪農総合研究所シンポジウム参加者	名	218	208	261
酪農諮問委員会	回	1	2	2
雪印種苗（株）の牧草・飼料作物種子による作付面積（2019年度比）	%	99.8	100.2	103.7

事例概要

森林保全による水源の涵養（かんよう）の取組み

- 雪印メグミルク海老名工場では2022年度より神奈川県「森林再生パートナー制度」に参画し、「かながわ森林再生50年構想」に賛同、森林再生の取組みを始めました。「恵megumiの森」と名付けた森林では、森林整備や自然観察など従業員参加の活動を通し、環境保護やボランティアに対する意識を高め、水源の涵養に向けて取り組みました。
- 雪印メグミルクでは従来、植林などの森林保全やカーボン・オフセット制度の活用を通じ、森林保護に取り組んできました。野田工場では、2022年度より利根川の源流域に位置する森林保全プロジェクト（日本製紙木材株式会社 群馬・須田貝社有林間伐促進プロジェクト）の取組みを始めました。今後も森林保全の支援を順次拡大していきます。



「恵 megumi の森」（神奈川県愛甲郡清川村）



須田貝社有林（群馬県利根郡みなかみ町）

取組み内容	対象場所	開始年	面積(概算)	前年差
北海道「適有林オフセット・クレジット」	酪農と乳の歴史館	2015年	6ha	+4ha
北海道中標津町「中標津町町有林J-クレジット」	なかしべつ工場	2017年	2ha	
NEW 神奈川県「森林再生パートナー」ネーミングライツ森林「恵 megumi の森」	海老名工場	2022年	3ha	+3ha
NEW 「日本製紙木材 群馬・須田貝社有林間伐促進プロジェクト」に関わるJ-クレジット	野田工場	2022年	8ha	+8ha
			合計 19ha	+15ha

情報源

<< 会社HP >> ～ 地球温暖化の防止 ～

<https://www.meg-snow.com/csr/environment/burden.html>

成果（見込含）

環境／生物多様性保全

■ 製造・廃棄における資源循環・生物多様性への取組み

資源循環・環境／生物多様性保全・廃棄物削減

取組背景（目標）

当社では、限りある資源を有効利用していくために、廃棄物の排出量を2030年度までに2013年度比30%削減やリサイクル率をKPI（重要管理指標）として定めている。当社の廃棄物量として最も多い、排水処理から発生する脱水汚泥を削減するため、汚泥転換率の低い排水処理設備を導入している。また、プラスチックの高度リサイクル（マテリアルリサイクル、ケミカルリサイクル）の推進や、フードバンクと連携した食品ロス削減の取組みなど、サーキュラーエコノミーの実現に寄与できる取組みを多角的に進めていく。

事例概要

■ 廃棄物削減への取組み

廃棄物（汚泥）発生量の削減

当社では、工場が一番多く発生する廃棄物が排水処理から排出される汚泥である。磯分内工場では排水処理設備を更新し、油分の分解に優れたトルラ酵母を用いた標準活性汚泥法を採用し、前処理でより多くの有機物を分解することで余剰汚泥の発生を抑え、汚泥の減容化を図っている。これにより、2020年度の汚泥発生量は2019年度と比べ約70%削減することができた。



磯分内工場の排水処理設備

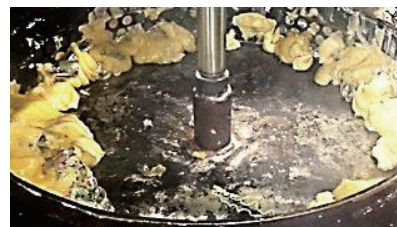
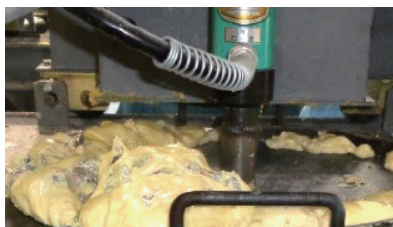
また、野田工場でも、標準活性汚泥を長時間の高DO（溶存酸素量）状態にすることで汚泥の自己消化により減容させる汚泥減容化設備を導入。これにより、約30%の汚泥削減が期待できる。

廃棄物（汚泥）発生量の削減

当社では、工場での製造時における食品廃棄物の発生抑制に努めているが、発生した場合は可能な限り食品リサイクル*として再利用するよう取り組んでいる。

2019年より、阿見工場では、アルミで個包装されたチーズから中身を分離する技術を養豚会社と共同で開発。成型不良などで出荷できず焼却処理せざるを得なかった食品廃棄物を豚の飼料として再利用することに成功した。その結果、阿見工場の食品リサイクル率は大きく向上し、99%となった（2022年3月現在）。

*食品リサイクル：食品廃棄物を飼料や肥料等、資源として有効利用すること



処理機にアルミ包装のチーズを入れ、上から圧力をかけ、チーズだけを絞り出す

廃棄物（汚泥）発生量の削減

当社では、食べられるのに廃棄される商品（食品ロス）を減らすため、様々なことに取り組んでいる。商品供給に関して、生産・営業・物流部門が日々連携して、販売計画や各種データを加味した需給計画とその見直しにより、サプライチェーン上での食品ロス削減に努めてきた。また、品質への影響が無いことが確認できた商品の賞味期間延長を順次実現している。



賞味期限延長した商品の一例

情報源

<< 会社HP >> ~ 循環型社会の形成 ~

<https://www.meg-snow.com/csr/environment/reduce.html>

<< 会社HP >> ~ ESGデータ一覧 ~

https://www.meg-snow.com/csr/esg-data/pdf/ESG_data.pdf

成果（見込含）

廃棄物削減・食品ロス削減

《循環型社会》		2020	2021	2022
廃棄物排出量（一般事業系廃棄物含む） ^{※1}	千t	16.2	19.1	20.0
廃棄物排出量 ^{※1}	千t	15.6	18.3	19.2
廃棄物リサイクル量 ^{※1}	千t	14.9	17.4	18.9
廃棄物リサイクル率 ^{※1}	%	95.4	95.2	98.8
食品廃棄物排出量 ^{※2}	千t	3.7	4.2	5.8
食品廃棄物リサイクル量 ^{※2}	千t	3.1	3.6	5.5
食品廃棄物リサイクル率 ^{※2}	%	83.6	86.2	94.8

環境／生物多様性保全・環境負荷低減①

取組背景（目標）

食品廃棄物削減については、「Glicoグループ環境ビジョン2050」でも取り組むべきテーマの1つとし、2050年までにサプライチェーンの効率化や需給予測精度の向上等、廃棄が発生しない取り組みに注力するほか、商品の微細な欠け等、品質に問題がない商品をふぞろい品としてアウトレット販売を行う等、食品廃棄物を95%削減（2015年度比）することを目指している。

事例概要

CO₂排出量削減・省エネルギーへの取り組み

・サプライチェーン全体におけるCO₂排出削減

地球温暖化の防止にむけて、当社自身のCO₂排出量だけでなく、その上流において購入した原材料等の製造・輸送に伴う排出量や、下流において当社が製造・販売した製品の流通・使用・廃棄などに伴う排出量を、サプライチェーンの各段階で算定・把握し、サプライチェーン全体で効率的に削減することが求められている。

当社では、『GHGプロトコル「スコープ3基準」』*に基づき、サプライチェーン全体の排出量の算定を開始した。



* GHGプロトコルとは、温室効果ガス (GHG) 排出量の算定と報告の基準で、GHGプロトコル「スコープ3基準」とは、サプライチェーン排出量に関する国際的基準の1つ。

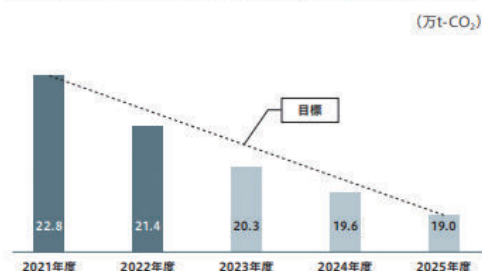
CO₂ 排出目標の明確化

2030年度のCO₂排出目標である2013年度比50%削減を確実に達成するため、年度毎の数値目標をロードマップとして定め、中間地点である2025年度のCO₂排出量を明確にし、きめ細かく進捗管理をしています。

	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度
目標	-	21.8	20.9	19.9	19.0
実績	22.8	21.4	20.3(見込)	19.6(見込)	19.0(見込)
スコープ1	11.7	11.3	-	-	-
スコープ2	11.1	10.1	-	-	-

(万t-CO₂)

CO₂ 排出量 ((スコープ1+スコープ2)、雪印メグミルク単体)



事例概要

用水使用量削減の取組み

用水使用量削減に向けた取組みとして、雪印メグミルク福岡工場・野田工場に続き、海老名工場へろ過器逆洗水回収設備を導入しました。海老名工場では工場用水に井戸水を使用しており、不純物を取り除くためのろ過器を設置していますが、定期的に逆洗し、付着した不純物を取り除く必要があります。今回、この逆洗水を有効に利用するための装置を設置することで、約2.6万m³/年の用水使用量の削減が見込まれます。

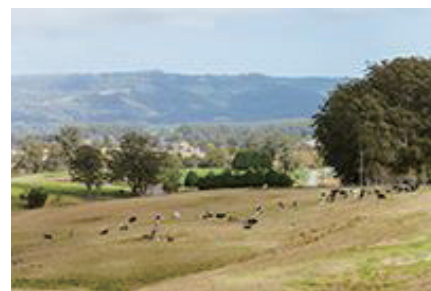


ろ過器逆洗水回収設備(海老名工場)

・ホエイ提供による水資源有効活用

当社では、チーズ製造の副産物であるホエイを乳牛の飲用水として酪農家に提供している。

オーストラリアは放牧による酪農が基本となっているが、近年は降水量が少なく、雨水や地下水の確保が不十分な場合は、牛の飲用水として水道水を利用することがあり、コストアップとなっている。ホエイの提供は、酪農家の水資源費用を削減すると共に、ホエイの廃棄削減、貴重な水資源の有効活用と、循環型社会の形成に役立っている。



オーストラリアの放牧

情報源

<< 会社HP >> ～ 地球温暖化の防止 ～

<https://www.meg-snow.com/csr/environment/burden.html>

<< 会社HP >> ～ 循環型社会の形成 ～

<https://www.meg-snow.com/csr/environment/reduce.html>

<< 会社HP >> ～ ESGデータ一覧 ～

https://www.meg-snow.com/csr/esg-data/pdf/ESG_data.pdf

成果（見込含）

CO₂排出量削減・資源循環・廃棄物削減

《地球温暖化防止》		2020	2021	2022
電力使用量 ^{※1}	百万kWh	229	230	259
総エネルギー使用量（原油換算） ^{※1}	千kl	109.4	110.8	128.7
燃料使用量（原油換算） ^{※1}	千kl	52.3	53.2	63.7
電力使用量（原油換算） ^{※1}	千kl	57.0	57.6	64.9
再生可能エネルギー使用量	kWh	24,500	26,668	31,733
CO ₂ 排出量 ^{※2}	万t-CO ₂	22.4	27.2	25.5
スコープ1 ^{※2}	万t-CO ₂	11.5	14.6	14.0
スコープ2 ^{※2}	万t-CO ₂	10.9	12.6	11.5
スコープ3合計	万t-CO ₂	236.4	224.7	231.6

《水資源》		2020	2021	2022
水資源使用量 [※]	千m ³	10,800	10,800	12,100
排水量 [※]	千m ³	10,400	10,400	11,400

※ 2022年度より7グループ企業集計。（雪印メグミルク㈱、いばらき乳業㈱、甲南油脂㈱、みちのくミルク㈱、ハッポ乳業㈱、雪印種苗㈱、雪印ビーンスター㈱）

資源循環・環境／生物多様性保全・廃プラ削減

取組概要

・プラスチック使用量の削減

2030年度までに石油由来のプラスチックの使用量（売上原単位）を2018年度比25%削減する目標をKPIとして定め、プラスチック削減に向けた取組みを推進している。この取組みを加速するため、2021年度から脱プラ分科会を立上げ、ヨーグルト容器の紙化やバイオマスプラスチックを配合した容器の導入など、具体的な施策を検討している。

容器包装における取組み

■ストローの石油由来のプラスチックを削減するため、学校給食用牛乳でストローレス容器の導入、バイオマスプラスチック配合ストローの提供を2023年4月から開始しました。この取組みにより最大で年間約5,400万本（約18t）の石油由来のプラスチック削減が見込めます。また、ストローの石油由来プラスチック削減として2022年3月から果汁飲料に貼付するストローをバイオマスプラスチック配合ストローに切り替えました。

■リデュースの取組みとして、容器包装に使用されているプラスチック製キャップの薄肉軽量化など、プラスチック使用量の削減にも努めています。ストローへの取組みも含め、今後、43t/年の削減が見込まれます。



製品	対象資材	石油由来プラスチック削減量（見込）	導入時期
飲料品	ストロー	8t/年	2022年3月
業務用デザートソース	ボトル	9t/年	2022年6月
毎日骨ケア MBP [®] ペットボトルタイプ	キャップ	1t/年	2023年3月
キャップ付き小型容器	キャップ	6t/年	2023年3月
Dole [®] アップル 100% 280ml	キャップ	1t/年	2023年3月
学校給食用牛乳	ストロー	18t/年	2023年4月
		合計 43t/年	

廃プラ削減目標の設定

雪印メグミルクはプラスチック使用製品産業廃棄物等の排出量が250t/年を超えるため、「多量排出事業者」に該当します。この対応として2023年度の全社環境目標より、新たにプラスチック排出の抑制および再資源化などに関する目標を定めました。今後、進捗状況の外部公表を実施していきます。

<新たに追加した内容>

全社環境目標

- ・2030年度までに廃プラスチック排出量(産業廃棄物)を15%削減(2018年度比)
- ・2030年度までに廃プラスチックリサイクル率を98%以上

■ 資源の有効活用

・ペットボトルの作業服へのリサイクル

当社の全16工場といばらく乳業(株)で使われる作業服の生地に1着当たり約18～29本の使用済みペットボトルを使用している。

年間では約57,000本のペットボトルが使用されています。生地を作るうえで、新しい資源の利用が削減されるとともに、使用済み資源の有効利用につながるなど、環境負荷の低減に貢献している。



エコロジャーウェア®マーク

情報源

<< 会社HP >> ~ 持続可能な資源の利用 ~

<https://www.meg-snow.com/csr/resource/>

<< 会社HP >> ~ ESGデータ一覧 ~

https://www.meg-snow.com/csr/esg-data/pdf/ESG_data.pdf

成果 (見込含)

プラスチック使用量の削減

《循環型社会》		2020	2021	2022
包装材料使用量(紙、プラスチック、ガラス、アルミほか)	千t	57.7	58.9	58.5
プラスチック廃棄物リサイクル量	千t	1.70	1.72	1.69
プラスチック廃棄物リサイクル率	%	93.7	97.5	98.0

■ 物流における取り組み

環境／生物多様性保全・環境負荷低減

事例概要

■ 【 モーダルシフトへの取り組み 】 ～ エコレールマークの商品認定 ～

・「VMI (Vendor Managed Inventory /ベンダーによる在庫管理)」システム構築

モーダルシフトとは、貨物輸送を自動車から鉄道・船舶へと切り替えることでCO₂排出量を削減し、環境負荷を削減する手法です。当社は、北海道の工場で製造した商品の北海道外への輸送についてモーダルシフトを積極的に進めており、2007年9月より継続してエコレールマーク取組企業の認定を受けている。特に練乳類については道外販売分の100%が鉄道輸送であり、現在、練乳など7品目でエコレールマーク商品認定を受けている。



情報源

<< 会社HP >> ～ 気候変動への取り組み ～

<https://www.glico.com/jp/csr/about/environment/climatechange/>

成果 (見込含)

CO₂排出量の削減